

# 聴覚障害教育の専門性と 授業研究会による研修の成果及び課題に関する検討

雁丸 新一 青柳 泰生 田万 幸子  
田中 優子 苦瓜 道代 加藤 慎一

本研究では、本校高等部において実施された部内授業研究会の記録から、授業研究会による研修の成果と課題について検討した。その結果、指導案作成上の留意点や授業の内容や流れ、板書・教材の提示、生徒とのコミュニケーションについての配慮や工夫、また、授業者が課題としている点に関する助言を積極的に参加者に求めること、さらに、経験年数や専門教科などが異なる参加者の的確な発言等によって授業研究が深まることが示された。一方、聴覚障害教育における専門性の継承や共有などの観点から、授業研究会により得られた知見などを資料として蓄積していくことの必要性も示唆された。

【キーワード】 授業研究会 専門性 高等部

## 1 はじめに

聴覚特別支援学校（以下、聾学校）の教科指導においては、教師が教科指導と聴覚障害教育の専門性をもつことが重要である。特に、聴覚障害教育に関わる専門的な内容は、きわめて多様かつ多量であり、指導力の向上には専門的な知識や技能の正確な習得と教育の場での実践が欠かせないことが指摘されている（四日市，2014）。

このような専門性の習得や向上には、資料や文献、経験年数の長い教師、授業の参観、研修会や研究会への参加から学ぶなどのさまざまな取り組みが考えられる。特に、現実的かつ具体的な取り組みや課題について検討するための方法として、部内や校内での授業研究会が挙げられる（雁丸・青柳・鈴木・高木・外山，2013）。

雁丸ら（2013）は、部内授業研究会の記録をもとに、授業研究会による研修の成果と課題について検討した結果、聾学校の教科指導における配慮や工夫を明らかにしたり、授業者や参加者が互いに専門性を研鑽するという意味できわめて重要な役割を果たしていることを示した。

## 2 目的

本研究では、本校高等部において実施された部内授業研究会の記録をもとに、授業研究会による研修の成果と課題について検討する。その際、授業研究会において重要な要素である参加者の発言、特に、発言回数と発言内容を分析することにより、授業研究会で着目された点やその具体的な内容について明らかにする。これにより、聴覚障害教育の専門性に関する基礎的な資料が得られると考えられる。

## 3 方法

### (1) 対象

平成 25 年度に本校高等部に着任した 4 名の教師による研究授業についての部内授業研究会を対象とした。4 名の教師のプロフィールを Table 1 に示した。

Table 1 教師のプロフィール

教師	教科	教員経験年数	経験校種
T1	英語	28年目	本校中学部
T2	国語	9年目	中学校, 高等学校
T3	保健体育	9年目	本校小学部
T4	数学	1年目	

(2) 実施時期

本校高等部において当該年度に着任した教師による研究授業の部内授業研究会については、授業研究会による研修の成果等をその後の授業に活かすことができるよう、実施時期を2学期に設定し、原則的に授業者が研究授業のVTRなどを見直し、十分に反省する時間を確保することができるよう、授業研究会は研究授業の翌日以降、かつ1週間以内に行われた。

研究授業や研究会の日程は、学校行事等を考慮しつつ、授業者による科目や学習グループ(クラス)などの候補から検討し、T1とT2の研究授業は10月2日、その授業研究会は翌日に、T3の研究授業は10月9日、T4の研究授業は10月10日に行われ、その授業研究会は10月11日に行われた。

研究授業の概要として、科目名、単元名、単元の目標をTable 2~5に示した。

Table 2 T1による研究授業の概要

科目名 コミュニケーション英語 単元名 Soccer Uniforms Say a lot about Countries 単元の目標 (1) S+V+O+to不定詞、関係代名詞を用いた表現を理解する。 (2) サッカー代表チームのユニフォームのデザインに託された各国の歴史や文化についての内容を理解する。
---

Table 3 T2による研究授業の概要

科目名 国語総合A 単元名 羅生門 単元の目標 『羅生門』は、小説を読む面白さを味わう様々な要素(主人公である下人の心理の変化、作品全体に流れる不気味な雰囲気、巧みな比喻表現など)を持った作品である。本小説の主題は、生きるか死ぬかの極限状態にいる登場人物(下人、老婆)の行動を通して人間のエゴイズム(自己中心主義)について考えるところにある。エゴイズムについて考えることができ、生徒達にとって、人間の本質とは何かを考えさせるきっかけにもなるよう、指導に努めたい。一学期には小説『とんかつ』で登場人物の心理を読み取る学習をしたが、本作品では、主人公である下人の複雑な心理の動きの読み取りを通じて、更に一歩進んだ読解力の向上を図りたい。
---

Table 4 T3による研究授業の概要

科目名 保健 単元名 現代社会と健康 単元の目標 (1) 生活習慣病や感染症、薬物乱用、心の問題、交通事故などの現代の健康問題について理解する。 (2) 現代の健康問題に対する対策を理解し、考える。
---

Table 5 T4による研究授業の概要

科目名 数学 I 単元名 二次関数 単元の目標 二次関数とそのグラフについて理解し、二次関数を用いて数量の関係や変化を表現することの有用性を認識するとともに、それらの事象の考察に活用できるようにする。
---

(3) 部内授業研究会の概要

高等部の部内授業研究会では、まず授業者が①授業の趣旨、学習グループや生徒の様子、単元のねらい、授業の反省点など、また授業者が現在課題としている点について述べた。次に、参加者全体で②指導案についての協議、③授業の内容や流れ、板書・教材の提示、生徒とのコミュニケーションについて協議された。最後に、授業者が④本時の目標をどの程度達成できたかについて述べた。これらの内容が一つの研究授業について、1時間を目処に行われた。

授業者は、授業研究会参加者が具体的な場面などを共有し協議することができるよう、PowerPointにより研究授業の様子や板書をスクリーンに提示した(Fig. 1~4)。また、必要に応じて、研究授業のVTR記録を再生・提示できるようにした。



Fig. 1 T1による研究授業の様子

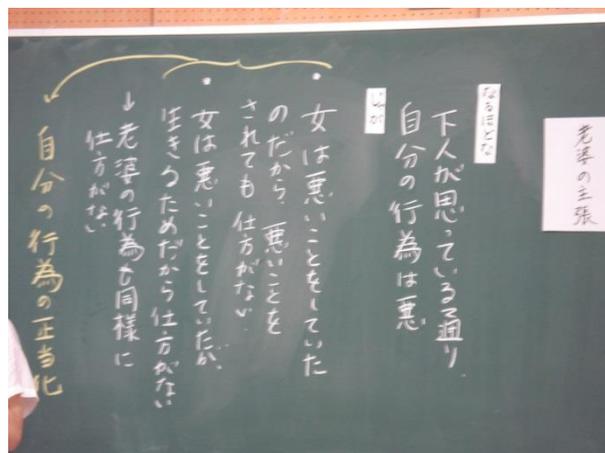


Fig. 2 T2による研究授業の板書



Fig. 3 T3による研究授業の様子



Fig. 4 T4による研究授業の板書

#### (4) 分析方法

T1～T4 による授業研究会の記録を資料として、発言回数と発言内容から分析を行った。発言回数と発言内容については、姫野・相沢（2007）を参考として作成された、雁丸ら（2013）の分類を用いた。

## 4 結果

### (1) T1の授業研究会について

T1の授業研究会における参加者の発言回数は全体で31回であり、その内容を分類してそれぞれの頻度を求めたのがTable 6である。

Table 6 T1の授業研究会における発言回数と発言内容

発言内容	指導案	内容や流れ	板書・教材	コミュニケーション
質問	0	4	2	5
意見	0	2	1	2
応答	0	6	3	6
その他	0	0	0	0

表から、T1の授業研究会においては、主に授業の内容や流れ、生徒とのコミュニケーションについての協議がなされていたことが示された。特に、英語によるやりとりの目的や英語を読話することにつ

いての協議がなされ、英語でのやりとりをする場合の配慮の必要性について確認された。また、その具体的な方法として、英語とフラッシュカードの同時提示や、聴覚障害のある教師からは、生徒自身が読話した内容を視覚的に確認するための英文の提示などが提案された。

一方、聾学校の英語の指導では、特に、読み書きの力を生徒に身につけさせることの重要性についても協議され、生徒に実用英語技能検定の上位級、具体的には、英語の力がある生徒の場合には2級の取得を目標とさせることなどが示された。これについては、生徒の英語の学習に対する動機づけとなること、また、生徒が大学などへの進学を希望する際には、大学などに対して生徒の英語の力や生徒の学力を客観的に示すものとして有効であることなどの意見交換もなされた。

### (2) T2の授業研究会について

T2の授業研究会における発言回数は全体で21回であり、その分類をTable 7に示した。

Table 7 T2の授業研究会における発言回数と発言内容

発言内容	指導案	内容や流れ	板書・教材	コミュニケーション
質問	0	2	2	1
意見	0	0	4	2
応答	0	2	6	2
その他	0	0	0	0

T2の授業では、PowerPointが活用されていたことから、特に、板書・教材の提示についての協議がなされ、板書とPowerPointの使い分けやPowerPointによる提示の際の配慮や工夫などが示された。具体的には、まず、生徒の思考の整理や発言を評価するために、生徒の発言を板書することの必要性が確認された。その上で、PowerPointを利用する際の配慮として、スライド中の注目すべき箇所を示すためのポインタ（指し棒）や板書に注目させたい場合のミュート機能の活用が示された。また、PowerPointを利用する際の工夫として、既習内容についてはPowerPointを利用し、本時の学習内容については板書により提示する方法などが示された。

生徒とのコミュニケーションに関しては、音読の位置づけについての質問がなされ、授業者からは漢字の読みの確認などを目的としていること、また国語科の教師からは、音読の重要性、特に、生徒が内

容を理解する上で必要であることや読みに要する速度が思考力と関係していることなどが意見として述べられた。

### (3) T3 の授業研究会について

T3 の授業研究会における発言回数は全体で 24 回であり、内容の分類を Table 8 に示した。

Table 8 T3 の授業研究会における発言回数と発言内容

発言内容	指導案	内容や流れ	板書・教材	コミュニケーション
質問	0	1	2	0
意見	0	5	3	1
応答	0	5	5	2
その他	0	0	0	0

T3 の授業研究会では、授業の内容や流れを中心として、協議がなされた。授業では薬物乱用と健康についての内容が扱われていたことから、特に、薬物乱用から社会問題への授業展開の方法についての意見交換がなされ、その際の具体的な工夫として、資料の活用などが挙げられた。また、授業の対象が高等部 1 学年であったことから、生徒の実態把握として、特に、生徒の既習の知識や中学部（中学校）の授業での理解の様子などについても参考にし、授業を計画することの重要性についても確認された。このことから、従来から指摘されているように生徒の実態に応じた授業の目標や展開の設定が重要であることが窺えた。

一方、理科の教師からは、生徒の薬物依存に関する発言の中で、「一度使うと」という表現がなされていたことを取り上げ、薬物依存の定義とその指導上の留意点について次のような意見が述べられた。向精神薬の場合には依存性が低く、一度使っただけで依存状態になるかどうかは明確ではないことから、その扱いには注意を要することが述べられた。このことから、他教科の教師による質問や意見の重要性も確認された。

### (4) T4 の授業研究会について

T4 の授業研究会における発言回数は全体で 41 回であり、その内訳を Table 9 に示した。

Table 9 T4 の授業研究会における発言回数と発言内容

発言内容	指導案	内容や流れ	板書・教材	コミュニケーション
質問	2	2	3	7
意見	1	2	2	3
応答	3	4	4	8
その他	0	0	0	0

T4 の授業研究会においては、幅広い内容の協議が

なされていたことが示された。指導案については、記載されている目標や学習活動と実際の授業との関係や、発問の意図などに関する質問や意見が述べられた。雁丸ら（2013）の検討においても、特に、新任の教師の授業研究では、指導案の十分な検討が必要であることが示された。

また、生徒とのコミュニケーションについては、発問の仕方や生徒の理解度を確認する際の留意点などを中心に協議がなされた。具体的には、生徒への発問や課題の指示内容などが確実に伝わっていない場面があったことから、事前に計画されている発問や課題の指示については、板書やカード等による提示、ICT の利用などの工夫が挙げられた。一方、生徒が学習内容を理解しているかどうかについて確認する際には、教師の「分かりましたか？」に対する生徒の「はい」や頷きによるやりとりでは不十分であり、確認すべき内容について、多角的に質問したり、説明させたりするなどの留意点が示された。

## 5 考察

本研究では、本校高等部において実施された 4 名の教師による研究授業についての部内授業研究会の記録、特に、発言回数と発言内容から、その成果と課題について検討した。

授業研究会により得られた知見などについては、授業研究会の記録として保管されていることが多く、部内や校内の教師はその記録を閲覧することは可能であるが、一般的に公開されることは少ない。本研究において示された知見は基礎的かつ基本的なものであるが、聴覚障害教育においては専門性の継承や共有などが課題とされていることから（アジア太平洋地域聴覚障害問題会議・全日本聾教育研究大会、2006；四日市、2014）、授業研究会により得られたこのような基礎的・基本的な知見を資料として蓄積していくことが必要である。

また、雁丸ら（2013）の検討では、参加者の質問や意見に対して、授業者が応答するという 1 対 1 の協議が大部分を占めていたことが課題として挙げられた。一方、本研究では、関係する教科の参加者を中心に意見交換がなされ、授業研究が深まっていた。

これは、授業者が授業の反省を述べる際に、課題とされている点についての助言を参加者に積極的に求めていたことによるものと考えられ、その有用性が示された。

さらに授業研究会については、従来から教師の専門性を研鑽する機会として、きわめて重要な役割を果たしていることが示されている一方で（齋藤，2008；佐藤，1994，1996）、授業研究会による研修の形骸化（佐藤・佐藤，2003；姫野・相沢，2007）、義務的意識により行われた授業研究会では、教師の研修になりにくいことなどが指摘されている（伊藤，1990）。しかし、本研究の授業研究会では活発な協議がなされ、その結果として、指導案作成上の留意点や指導上の配慮や工夫などが示された。これは、授業者が課題とされている点についての助言を積極的に参加者に求めていたことの他にも、さまざまな要素があると思われる。その一つに指導案検討会の実施がある。4名の教師とも教科内で指導案検討会が実施され、そのうち3名の教師に関しては、教科内での研究授業とその検討会も実施されていた。このような教科内での指導案検討会や研究授業の実施などの準備段階から、指導案や授業について検討を重ねていたことで、部内での研究授業と授業研究会による授業研究がより深まっていたものと考えられる。今後は、指導案検討会や授業研究会の効果なども視野に入れた実践的研究も必要であろう。

また、授業研究会については、参加者の経験年数や専門教科などが異なっていると授業研究が深まりにくいといったことも指摘されている。しかし、本研究では、授業研究会参加者の経験年数や専門教科が異なることにより、逆に、授業研究が深まることも示され、これは、姫野・相沢（2007）の指摘する、さまざまな視点から同一の授業について議論し合うことが授業研究会活性化の要素になるという見解とも一致していた。

一方、4名の教師による授業研究会の実施と分析、また、雁丸ら（2013）の検討から、授業研究会による研修をより深めるための視点として、①授業者も参加者も互いに研鑽できる場であること、②授業者が緊張し過ぎず、適度な緊張感で臨めること、③教

員間のコミュニケーションが日常的かつ十分に行われていること、が考えられる。①の視点については、授業研究会が一般的に授業者にとっての研修になりがちであることから、授業者による授業を中心としつつも、それを土台とした意見交換により、参加者にとっても研修の場となることを意味している。これは、Schon（1983）のいう、教師は日々の実践を絶えず省察する反省的実践家（reflective practitioner）であることを自覚して、互いに研鑽していく、ということのためにも必要だと思われる。また、②の視点については、研究授業が多くの特観者の中で行われることなどから、必要以上の緊張感を伴い、授業が日常のように行えないこともある。そのような研究授業についての授業研究会では、授業研究が深まりにくい場合もあることから、授業者が適度な緊張感で研究授業や授業研究会に臨めることが望まれる。さらに、③の視点については、研究授業や授業研究会がその場だけの研修として捉えられしまうことなく、教員間で日常的に授業などについての情報や意見交換がなされることで、研究授業や授業研究会での授業研究がより深まるものと考えられる。この点は、教師の反省的実践家としての専門職意識や授業者が適度な緊張感で研究授業や授業研究会に臨めることとの関係においても、きわめて重要であると思われる。

今後、授業研究会による研修がより深まることにつながる要因や要素についての研究も必要であろう。

#### 〔付記〕

本研究の一部は、第48回全日本聾教育研究大会において発表した。

#### 〔文献〕

アジア太平洋地域聴覚障害問題会議・全日本聾教育研究大会（2006）第9回アジア太平洋地域聴覚障害問題会議・第40回全日本聾教育研究大会（関東大会）大会要項，71。  
雁丸新一・青柳泰生・鈴木淳一・高木智史・外山菜保子（2013）部内授業研究会による研修の成果と課題に関する検討。筑波大学附属聴覚特別支援学

校紀要, 35, 62-67.

姫野完治・相沢一 (2007) 校内授業研究における事後検討会の分析方法の開発と試行. 秋田大学教育文化学部研究紀要 (教育科学部門), 62, 35-41.

伊藤功一 (1990) 校内研修—教師が変わる・授業が変わる. 国土社.

齋藤佐和 (2008) 授業研究—聾学校の授業について考える様々な方法. 聴覚障害, 63 (691), 36-39.

佐藤学 (1994) 教師文化の構造. 稲垣忠彦・久富善之編, 日本の教師文化. 21-41. 東京大学出版会.

佐藤学 (1996) 教育方法学. 岩波書店.

佐藤雅彰・佐藤学 (2003) 公立中学校の挑戦—授業を変える学校が変わる. ぎょうせい.

Schon, D.A. (1983) 柳沢昌一・三輪健二 (監訳), 省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考. 鳳書房.

四日市章 (2014) 聴覚障害教育における教師の専門性の形成. 障害者問題研究, 41 (4), 18-23.